

2016.7.13  
(ウッドマイルズフォーラム)



## 根羽村の概況



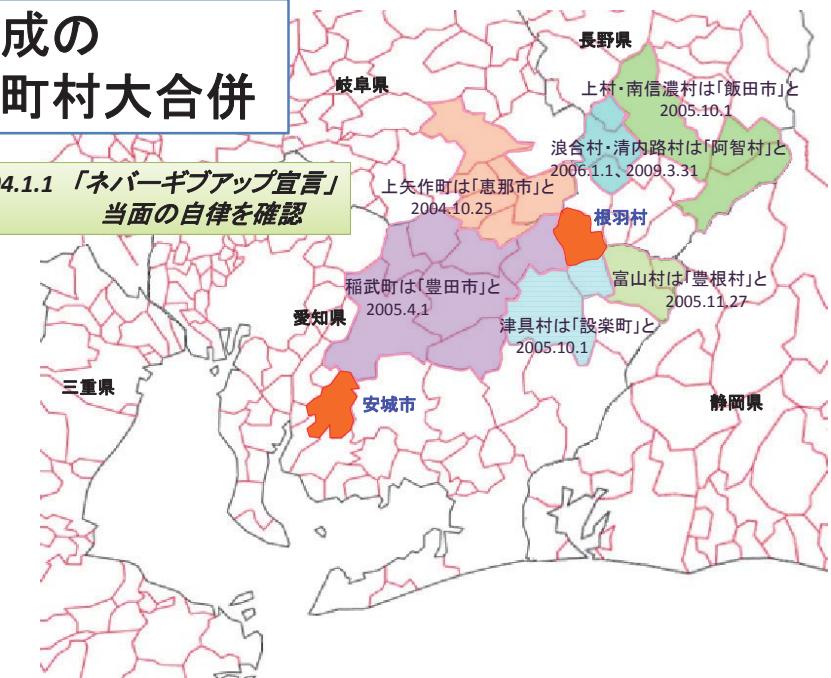
## 明治用水土地改良区の変遷

### ～水を使う者は自ら水をつくれ～

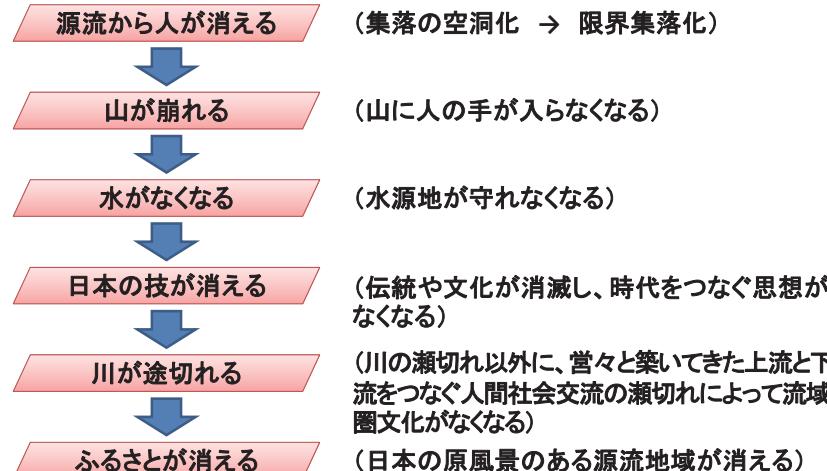
- 1808年(文化 5) 都築弥厚が明治用水開削計画を開始(多くの農民の反対)
- 1826年(文政 9) 明治用水開削計画測量図完成
- 1874年(明治 7) 岡本兵松・伊豫田与八郎の計画統合
- 1879年(明治 12) 本流の開削工事開始
- 1880年(明治 13) 中井筋・東井筋 初通水
- 1881年(明治 14) 西井筋完成、新水路を「明治用水」と命名
- 1885年(明治 18) 明治川神社創建
- 1906年(明治39) 用水管理組合が森林経営を議決
- 1908年(明治41) 旧下山村羽布造林地の地上権設定
- 1914年(大正 3) 根羽村の山林買収(564ha)植林開始**
- 1958年(昭和33) 現頭首工完成
- 2010年(平成22) 明治用水通水130周年記念式典
- 2011年(平成23) 「水のかんきょう学習館」開館
- 2013年(平成25) 根羽造林開設100年記念式典開催**

## 平成の市町村大合併

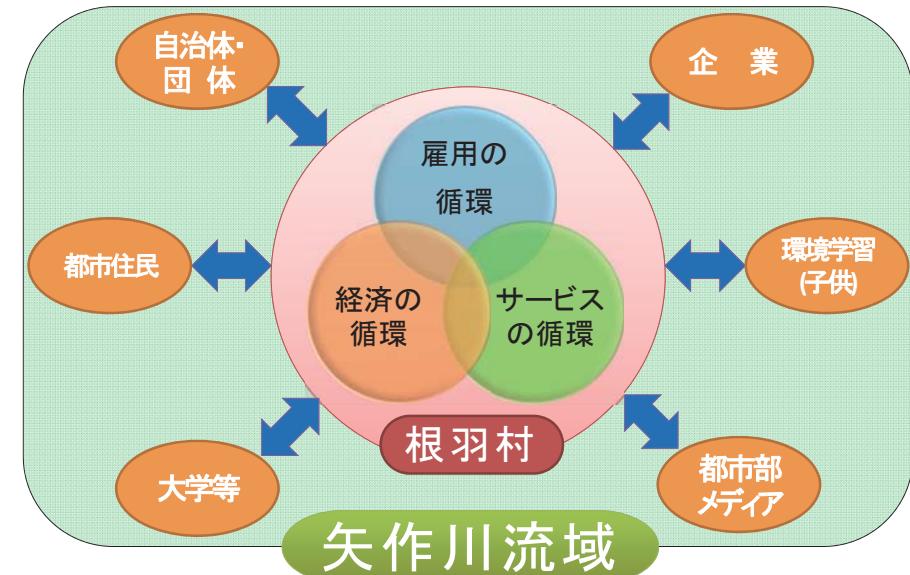
2004.1.1 「ネバーギブアップ宣言」  
当面の自律を確認



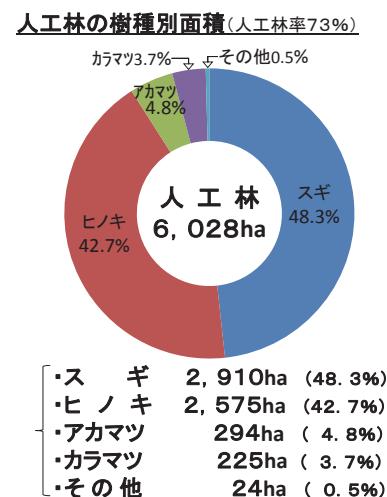
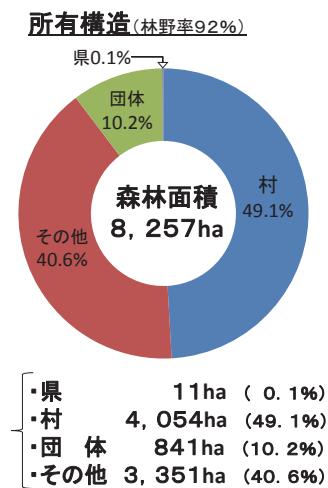
## 源流の危機と国土の危機



## 地域内循環と流域連携軸



## 森 林 の 状 況



## 根羽村林業のキーポイント

- ① 1907年(M40) 村有林を村民へ貸与  
全戸が森林保有者  
(一戸当たり 貸付林2.5ha+分収林3.0ha=5.5ha)  
「親が植え、子が育て、孫が伐る」親子3代の山づくり  
→ 山づくりへの熱意が強い
- ② 1914年(T 3) 明治用水土地改良区が、水源かん養林427haを購入  
→ 上下流交流の礎(水を使う者は自ら水をつくれ)
- ③ 1922年(T11) 村有林1,297haを国と官行造林契約  
→ 村の財政を潤した
- ④ 1995年(H 7) 村内最後の製材工場を村が購入  
→ 林業を再度「業」として再興

II  
**根羽村林業の再興期**

# 根羽村林業の再興期

それぞれの立場の、それぞれの疑問から始まった

(山元)

- なぜ、根羽の丸太が県外市場へ送られ、別銘柄(三河杉、東濃桧)となるのか
- 丸太に付加価値を付けたい → 製品で出荷すればよいかも
- 製材工場を作つて市場へ製品を出したが、なぜ思うように売れないのか

(設計士等消費者側)

- 地域材を使おうとしても、地域材はいったいどこにあるのか
- 地域材の品質や単価はきちんと保証されているのか
- 注文にきちんと対応できるのか

**情報の疎通=流通過程に問題があるのではないか**



1次産業  
(木材生産)

- ◎品質の保証された地域材を直接建築現場へ配達する「邸宅管理システム」による流通コストの削減



**トータル林業の確立**

2次産業  
(木材加工)

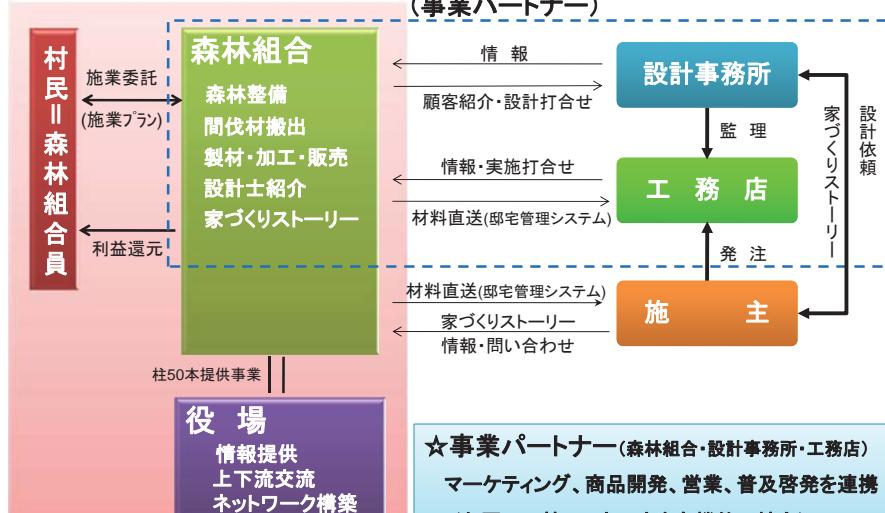
- ◎森林施業プランナーによる集約化・提案型施業の実施
- ◎作業路網と高性能林業機械による低コスト作業

3次産業  
(販売・利用)

- ◎設計士・工務店を通じての建築情報に基づき物件毎に厳密な製造管理
- ◎「高温セット法」による乾燥技術により安定した品質を保証



## 根羽村



○1994年(H6)

「ネバーランド」建設計画

地域材であつても県外市場へ送られ、三河杉・東濃桧として戻つてくる流通への疑問  
住宅建築での桧指向(信仰?)が強く、良質な杉材が活かされていない

○1995年(H7)

村で最後の一軒の製材工場閉鎖により村で工場を購入

○1996年(H8)

「根羽スギ」のブランド化への取り組み開始  
「根羽スギを考える会」発足 (役場・森林組合・若手設計者・工務店)  
板材主体の利用 → 構造材(梁・桁)への利用模索

村が木材加工施設を整備

○1997年(H9)

「根羽スギ」を構造材として現しにした住宅完成  
→ 乾燥技術の失敗による梁の割れ、床材の隙

乾燥技術の研究・向上 = **高温セット法の確立**

**確かな品質の確保**

○1998年(H10)

新製材施設整備

- 2001年(H13) 「根羽スギ」が県認証製品として認定
- 2002年(H14) 「根羽ヒノキ」が県認証製品として認定  
「伊那谷の森で家をつくる会」発足  
・木材有効利用を考えた山、つくり手、ユーザーとの関係づくり  
・コスト、空間の提案
- 2003年(H15) 木材乾燥施設整備(2基目)
- 2005年(H17) 根羽スギの柱50本提供事業開始
- 2008年(H20) 木材乾燥施設整備(3基目)
- 2011年(H23) 木材乾燥施設整備(4基目)  
構造材用モルダー施設整備
- 2012年(H24) 木屑ボイラー・グレーディングマシーン導入  
JAS認定工場資格取得(構造用製材)

山元から住宅を建設するエンジニアまで情報が、森林組合へ一元化する仕組みが完成し、トータル林業を可能とした

↓  
消費者ニーズへの対応と品質の向上へ結びつく

## 杉風の家



根羽スギモデル住宅



渡りアゴ構法



柱脚ち構法

## 低コストコンパクト住宅



低価格・コンパクト・施工の効率性が要所



根羽物置



セルフビルトが売り物

## 「地域材」を使うことが、なぜ重要なのか

健全な国土を守るには、どの地域にも人が住み続ける必要がある。  
地域材の活用は、「健全な山づくり」、「地域内でのお金の循環」、  
「地域文化や伝統の継承」など持続可能な地域づくりの原点である。



## 木材のカスケード利用が大切

森林を整備し、木材を利用することで環境整備と地域経済の循環  
が可能となる。

### 安城市デンパークでの「動く木のおもちゃと木のある暮らしアイテム展」



### 居心地の良い木の空間づくり(プレイスメイキング)



### 「トータル林業」で「環境立村」をめざす ～村の森林資源で建築とエネルギーの自給を図る～



### ねばねの里「なごみ」平面図





施設全景



特養棟中庭



ディサービス棟木のテラス



玄関ロビー



ディサービス室内



入浴施設

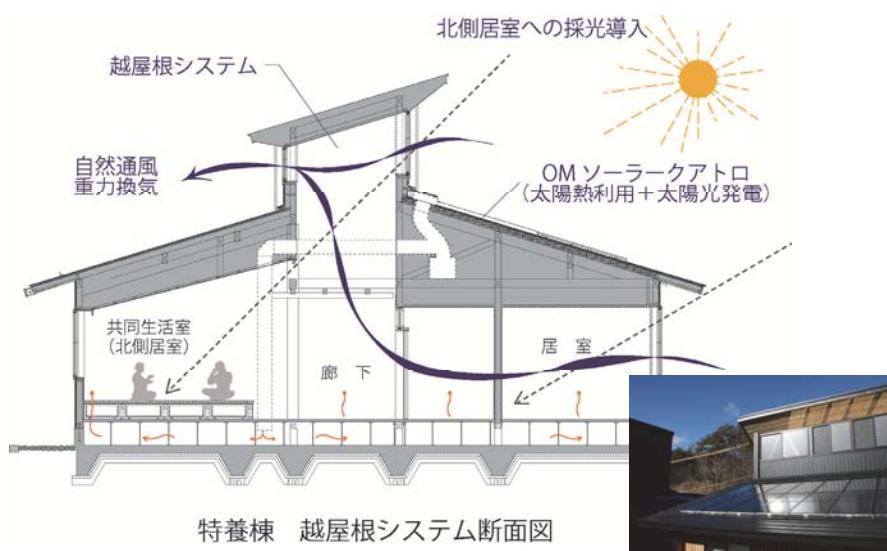


特養棟共同生活室



特養棟居室

### 村の自然エネルギーを活かし環境と省エネルギーに配慮



特養棟 越屋根システム断面図

### 床暖房と給湯に薪ボイラー活用



(作業性を考慮した広い軒と「山の木の物語」を描いたシャッター)

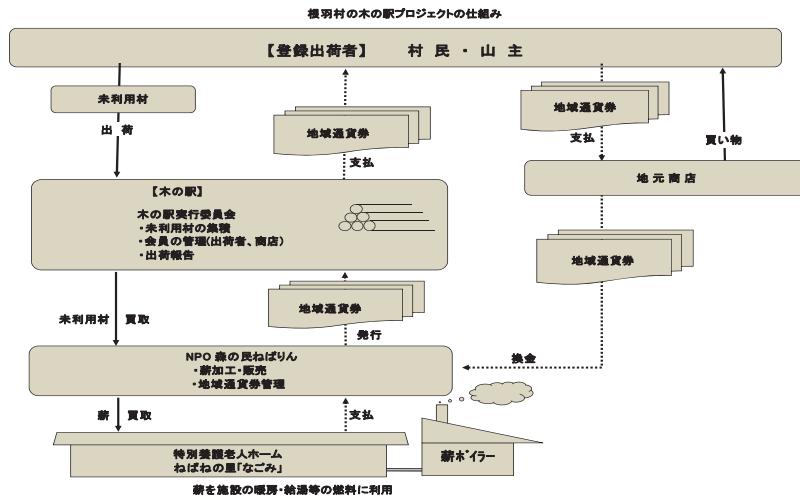
バイオマスボイラーハウス



薪ボイラー

- 地元の材を使う=CO<sub>2</sub>の固定(327t)
- 働く機会の創出
- 地域内経済の循環

## 自分の村のことは、自分達で決める 「木の駅プロジェクト」が始動



## ネバーランド(地域資源の加工販売)



**菜の駅プロジェクト** 買ってもらうのは野菜と根羽村とのつながり  
源流のおすそ分け野菜で始まる流域連携 参加農家10軒  
7~11月まで月2回発送 1箱3,000円 現在会員34名



## 葬式料理請負隊「菊の会」

2009年 結成

～新しい葬式の仕組みに村づくりの原点がある～



・地域でやれることでも村全体なら助け合うことができる



2009年『菊の会』結成

・村の食材を使って、村の商店から仕入れて、昔ながらの村の葬式料理を提供する。

村内でお金を循環させる  
自分達で仕組みを作り動かす



農文協「季刊地域」14号 写真=尾崎たまき

## 郷土食の祭典 食の文化祭

小さな村の豊かな食文化 地元の食材で今日も村民は元気一杯  
郷土食 80品目の出展 郷土食バイキングは大人気



## 信大農学部生による「山里の聞き書き塾」発足式

村の伝統・文化を次世代に残す 村民の誇りが素晴らしい  
冊子「長野県根羽村 ここは世界の真ん中 11篇の聞き書き」誕生



## 根羽村元気な村づくり活動団体実践報告会

村民一人ひとりが主役 20団体が発表 勢い余って終了は夜



## 矢作川沿岸水質保全対策協議会 ( 矢 水 協 )

1960年代 = 高度経済成長 = 公害問題

1969年(昭和44年) 矢水協発足(下流6農業団体、7漁協団体、6市町)

1972年(昭和47年) 矢作川水質汚濁防止の闘い(工場汚水、ゴルフ場開発等)

水質汚濁防止法(1971年)により、業者を告発し愛知県警が全国初の摘発

### 抗議・摘発時期

1974年(昭和49年) オイルショック

### 交流と学習期

流域は一つ、運命共同体

1978年(昭和53年) 根羽村の子供達を一色町へ潮干狩りに招待

1979年(昭和54年) 根羽村が矢水協加入

矢作川における民間主導の水質保全活動

矢作川方式

## 安城市茶臼山高原野外教育センター

1983年(昭和58年) オープン

毎年5月から8月上旬 安城市内全中学1年生が4泊5日で利用  
(キャンプ場、避難棟、浴室棟 外)



野外教育センター



安城市に寄贈された亀甲岩

## 根羽産木材の利用促進

「安城市公共建築物等における木材の利用の促進に関する方針」で、根羽産の木材の利用に努めるよう規定。(H26.4.1)

## 企業との連携・支援



## 森林の里親制度

### ○森林づくりへの企業の支援(アイシングループ6社)

アイシン精機(株)	H16. 4. 7~
アイシン・エイ・ダブリュ(株)	H16. 7. 20~
アイシン高丘(株)	H19. 4. 5~
アイシン・エーアイ(株)	H19. 4. 5~
アイシン化工(株)	H19. 4. 5~
(株)アドヴィックス	H24. 4. 1~

### ○支援金は村有林の間伐事業に活用

## 「矢作川水源の森」分収育林

茶臼山麓の官行造林地の伐採予定地の買い上げにより、森林保全と水源保護を計画  
安城市と根羽村で森林整備協定を締結

- ①立木(当時樹齢58年)買取代金等で1億4,500万円を安城市が根羽村に支払う
- ②立木は、今後30年間伐採しない
- ③間伐等森林の管理に関する費用は折半。伐採利益も折半。

森林整備協定…上下流の自治体が協力して森林整備を行うもので、平成3年に森林法が改正され、この条項が整備され全国で初めての取り組み



### (契約内容)

契約年月日 1991年12月6日(平成3年)

面 積 48.21ha

契 約 期 間 30年間

## アイシン交流写真



## 子供の環境学習への取組

- 根羽村は古くから学校林を経営
- 矢作川の清掃活動を通じ河川愛護への関心が高い
- 下流域の子供達が間伐体験等を通じ環境教育に重点

森林の持つ多様性と重要性を理解

地域づくりの担い手は、流域に住む子供達にかかっている



ネイチャースクール



間伐体験

## ドイツの小さな村に根羽村の未来が見える

～バイエルン州 レッテンバッハ村 人口830人でもここまでできる～

1978年 合併 1993年 州法を改正し独立

- ・自然再生エネルギーの活用(太陽光発電・バイオマス発電・薪、チップボイラー)
- ・地域通貨でお金を村内で循環させる取組
- ・村内の起業支援(若者がマイスターとして村に定着する)

☆ふるさとのプライドを子供達に自信を持って伝える



フィッシャー前村長の講演会



## レッテンバッハ写真



村長室でフィードル村長と



フィッシャー前村長さんと村挙げての交流会



交流拠点のスーパーマーケット



畜舎屋根での太陽光発電設備

## レッテンバッハ写真



役場地下の薪ボイラー設備



スーパーマーケット地下の薪保管状況



林業機械ブランツェルト社



地元のコラフクラブの皆さん

## 根羽村のトータル林業

### ①6次産業のトータル

伐採・搬出の一次～製材加工の二次～工務店への直送販売の三次

### ②全世帯森林組合員のトータル

### ③一本の木をすべて使うトータル

一本の木を建築部材として使用する外、樹皮、オガ粉、端材を乾燥機の木質ボイラーの燃料に無駄なく使う

### ④間伐材をすべて使うトータル

保育間伐で切り捨てられた未利用材を「木の駅プロジェクト」で村民から買い上げ、地域通貨で支払う

### ⑤人生のすべてのライフステージで木づかいを進めるトータル

### ⑥伐採・造林一貫作業により次世代に向けた森づくりを行うトータル

50年生以上、500本/haの林分づくりと帯状伐採による更新伐とコンテナ苗による植栽、獣害対策同時施行で次世代の山づくりをトータル的に行う

## 根羽村のトータル林業



### 環境立村による持続可能な地域づくり



### 広域連携による地域づくり



### 安全・安心な国土づくり

## 流域圏思想が日本を救う

### 源流は生命の供給源

(自然崇拜など精神文化が引き継がれている。  
二酸化炭素を吸収する源流域の森林の役割)



### 日本の森林の価値は無限大

(カーボンオフセットクレジット・健康や環境教育・  
生物多様性の保全・生産と消費)



### 源流社会は未来の日本

(都市と流域の農山村は一つの共同体である。  
人が幸せに、安心して、持続的に暮らせる社会  
のベース)



### 源流は日本の希望

(源流には、人間が本来持っているはずの、生き  
る力を目覚めさせる大きな力が潜んでいる。)



矢作川流域 ものさし



スギリン

ねばたん